

〈3.「メディア・文化のインターセクション」研究会〉

3-1. メディア・文化のインターセクション研究班

山森 宙史

1 共同研究会の趣旨紹介

社会学の領域において「文化社会学」、「ポピュラーカルチャー研究」、「サブカルチャー研究」、「メディア文化研究」という名目でメディア・文化研究が展開されてきて久しい。今日、その研究の定位する先は拡散し日々新しい研究対象が「発見」されてきている。また、それらに対するアプローチの仕方も、学際的なパースペクティブの共有が自明なものとなるなか、ますます横断的な状況におかれるようになってきている。

しかし、われわれの周りに遍在し続け、時と共にその様相を変化させ続けている対象に対し、これまでのメディア・文化研究は、どれだけの注意を払ってきただろうか、あるいはどれだけの研究が、学術的な正当性を保証され、「研究」として迎え入れられてきただろうか。あらためて問うてみると、そこには重要な課題が残されていることがわかる。それは、『スタディーズ』と『ディシプリン』の対立¹（大野 2011）として映し出される問題関心とも通底するものでもあるが、そこには対象選択と方法論の双方にかかわる問題が横たわっている。

そのひとつ、研究対象にどうアプローチするかにかかわる問題として、分析枠組・視角の更新の停滞をあげることができる。すなわち、事例や対象は新しくなる一方、それを学術的な媒体にアウトプットする段階において、そこでは往々にして先行する枠組みの影をトレースしたものに終止してしまうという事態である。このことは他方で、新たな研究対象から見出されうる分析視座が旧来の研究対象へとフィードバックせず、再検討の契機を失っている事態であるとも考えられるだろう。こうした分析枠組み更新の不履行は、結果として人々が対象との間にとりもつ日常的に自明なかかわりへの視座を見落としてしまうとともに、学術的に先行して認められているものを認め、後発の対象の学術的接続を困難にさせているのではないだろうか。

それゆえ、現在、メディア・文化研究に取り組むうえで、研究対象への分析視角・方法に焦点を当てて再検討していく営み——すなわち「何を研究するか」ではなく「どう研究するか」という問題意識——は、必須のものと考えられる。そこで本研究会では、文化・メディア研究において、それぞれの研究同士がぶつかり合う「つなぎ目（intersection）」を顕在化し言語化する研究視座を獲得するこ

1 メディア・文化研究に少なくない影響を与えているカルチュラル・スタディーズなどの、「実践」のほうに重きをおき、どちらかといえば方法論的にアドホックな研究の台頭によって「ディシプリン」としての社会学が揺るがされているという認識を指す（大野 2011）。

とを目的としている。この「インターセクション」という言葉には二つの含みがある。ひとつは、対象が布置しているさまざまな社会的要因の交差する場としての「つなぎ目」を、もうひとつは、横断的状况にある学術的アプローチそのものの「つなぎ目」を指す。われわれの目的は、これらふたつの「インターセクション」を顕在化させ、新旧問わずメディア・文化研究において対象に付与されてきた自明な切り口を相対化するとともに、それらを「きしませる」、すなわち批判的再考を促すことで、現在の文化・メディア研究が直面している課題とは何かを検討していくものである。

2 過去の研究会開催概要

2.1 読書会

以上の問題意識のもと、本研究班ではまず定期的な読書会を開催してきた。本研究班における具体的な読書会のスタイルとして、選書者がレジュメの作成と発表を行い、読書会終了後に、参加者の持ち回りで毎回読書会のリブライシートを作成し、メーリング・リストで共有するという形式を採用してきた。

第1回目から第3回目までの読書会では、メディア・文化研究における「消費」という視座の再検討を行った。これまでのメディア・文化研究では、「文化産業」論などの「生産」概念に優位性をもたせる議論に対し、「消費」概念は、「受容」という抽象的な枠組みの中に組み込まれ、表現や内容の享受を支えるものという程度の役割を与えられてきた。それゆえ、本研究班では、メディアや文化の社会的な存立において「消費」という受容行為の果たす役割を社会的に再検討することを目的とし、近年の消費社会論やメディア研究における消費の意味を捉え直す文献を中心に読書会を行った。

一方、第4回以降の読書会では主にメディア論・文化理論の古典的研究を再検討し、それが現在の研究状況にどのように接続していくことが可能かという問題意識を共有した。古典理論はそれが書かれた時代背景に強く規定されるため、現在の研究対象との直接的な接続にはいくつもの障害が指摘される。しかし、これら古典理論において重要なのはどのような内容かだけではなく、論者が各時代においてどのような経緯でその理論を紡ぎ出したのか、また、どのように先行するメディア・文化研究の問題を批判的に捉えたのかというプロセスへの視座もまた古典研究を現在の対象へと接続していく上で重要な含意を持っている。それゆえ、本研究班でもこうした古典理論における問題の着眼点、すなわち、「プロセス」に焦点を当てた読書会を行った。その上で、それらが現在の研究対象を分析する上でどのように有効であるかを中心に議論を展開した。

このように、本研究会では定期的に読書会を開催してきた。読書対象の選定や議論の深化において多くの反省点は残ったものの、参加者個々の研究関心に基づいた「読み」の場を継続できたこと自体は今年度のひとつの「成果」になったと思われる。

2.2 公開研究会

読書会と並行して、大学院生や研究員、そして外部の研究者を招いた公開研究会も逐次開催してきた。2011年度に企画した主な公開研究会として、7月に行われた関西圏の大学院生・若手研究員との合同研究発表会と、11月の学外研究者を講師として招聘した公開研究会の二つが挙げられる。

まず、7月の院生・若手研究員を中心とした公開研究会は「ポピュラー文化への挑戦」というテーマのもと、大阪市立大学大学院の松井広志氏と筆者（山森）の二名を報告者として企画・開催した。

同テーマの趣旨には、現在のポピュラー文化研究における研究対象・領域の拡がりとは並行して研究する側に突き付けられる、「何のための研究？」「好きなもの研究なのでは？」というアカデミックな要請の高まりの中で、どのようにポピュラー文化を学術的に記述していくのか、という問題意識がある。一人目の報告者である松井氏は、立体物（モノ）としてのコンテンツ受容に焦点を当て、記憶を「モノ」として再現する受容行為を社会学における「集合的記憶論」から説明を試みる。一方、筆者は、研究史的にはほとんど顧みられていないコミックス（マンガ単行本）というマンガの出版形態のメディア史を通じて、戦後マンガ史の再考の必要性を説いた。模型、マンガ、と両者の扱う研究対象には大きな違いがあるものの、「時間」、そして「物質性」という共通した分析視角からポピュラー文化を記述する試みは、テキストやコンテンツ内容の特殊性に依存するのとは異なる視座から「ポピュラー文化」へと接近していこうとするものである。もちろん、こうした研究視座は必ずしも現在において「新奇」なものではないかもしれないが、依然として深化されているとは言い難いのも確かである。それゆえ、当日フロアに集まった参加者からも、「ポピュラー文化をいかに記述するか」という問題意識の共有のもと、報告者から提示された研究視座をめぐる積極的な議論が行き交った。

この「ポピュラー文化」をめぐる「時間」・「物質性」という問題意識を引き継ぐようにして、11月には学外研究者を招聘した公開研究講座を企画・開催した。今回は愛知淑徳大学専任講師の溝尻真也氏をゲスト講師としてお招きし、「技術からの排除とメディア文化の変容——オーディオ趣味の変遷を軸に」というテーマのもと研究発表をして頂いた。本研究会では、自作オーディオサークルに集う世代の異なる三人のインフォーマントのライフヒストリーから、各人それぞれのオーディオ自作という営みから紡ぎだされた「技術についての語り」が、ラジオ技術が発展し受け手にとってブラックボックス化する過程と並行して、自己が置かれたその時代ごとの社会を理解するうえでどのように意味付けされていたのかを説明された。その上で、単純な意味での「技術からの疎外」や「能動的な受け手」といった議論からはこぼれ落ちてきた「楽しい」営み＝趣味としての技術とのかかわりのあり方こそが、人々と技術をめぐる生きられた経験の位相ではないかと指摘された。こうした溝尻氏の報告をつうじて、今なおラジオというメディアへのアプローチにおいて研究史的に不問とされてきた視座が横たわっていること、そのための新たな分析視座の必要性を実感した。

以上のように、今年度の「メディア・文化のインターセクション」研究班における公開研究会ではメディア・文化研究における「時間」・「物質性」・「技術」という視座の再検討を中心に議論が進められてきたといえる。もちろん、こうした視座には常に「決定論」や「疎外論」といった批判が付きまとうものであり、また同時に、そこからテキストやコンテンツへの新たな研究のフィードバックが求められることはいうまでもない。それでも、公開研究会の場で交わされた諸種の議論は、本研究班の趣旨であるメディア・文化へと接近する際の新たなパースペクティブの深化という点で大きな示唆をもたらしたと思われる。

3 各寄稿者の内容紹介と共同研究内での論考の位置づけ

今回の特集に際して「メディア・文化のインターセクション」研究班は、学外から定期的に本研究班に参加して頂いている三名の研究者より論稿を寄せていただいた。加えて学内からも、大学院前期課程の範梶煒氏による書評コラムを寄せてもらっている。簡潔な要約を本研究班の趣旨とともに述べておきたい。

まず塩見翔氏の論稿「大学鉄道研究会の女性会員に関する一考察——1980年代の機関誌および現代の聞き取り調査から」は、これまでの鉄道趣味研究においてほとんど調査の対象としては問われてこなかった女性の鉄道ファンに焦点を当てたものである。2000年代初頭に刊行された菊池直恵のマンガ『鉄子の旅』（小学館）を始め、90年代後半から2000年代初頭にかけて女性の鉄道ファン（通称「鉄子」）に注目が集まった。しかし、女性の鉄道ファンの存在はそれほど近年に特有のものなのだろうか。こうした問いに対し、本稿では80年代の大学鉄道研究会の機関誌に書き綴られた女性会員の記事を丁寧に分析し、そこから「鉄子」登場以前の女性の鉄道ファンがそのほとんどの会員数を男性会員で占められる鉄道研究会という空間でどのような立ち位置を占めていたのかをリアルに描き出していく。その上で、現代における女性の鉄道ファンへの聞き取り調査から、「男性の趣味」にのみ還元されない鉄道趣味の在り方を提起していく。こうした塩見氏の「見過ごされてきたもの」を掬い取る分析視座は、現在大きな広がりを見せている趣味・ファン研究に携わる人にも大きな刺激となるだろう。

次の松井広志氏の論稿「物語・記憶・疑似アウラ——『実物大ガンダム』の〈魅力〉と物質性をめぐる考察」では、近年頻繁に目にするようになったマンガやアニメなどのメディア・コンテンツを立体化した「実物大モニュメント」にかんする社会学的アプローチが展開される。「モニュメント」というと、社会学では文化遺産研究に代表されるような権力や政治への問題意識が想起されるかもしれない。一方、マンガやアニメなどのサブカルチャーを対象としたメディア研究では、主にテキストや表現にその関心の比重が偏る傾向がある。しかし、松井氏はそのいずれとも異なる視座から M. アルバックスと W. ベンヤミンという二つの社会学における古典研究を援用しながら「実物大モニュメント」という対象へと接近を試みる。そこでは、テキストや表現、内容といった「視聴」に収斂されるようなサブカルチャーの受容とは異なる、物質的な顕現において生起する「記憶」という受容形態によって成立するメディア経験の在り方が提起される。更に、そうしたオーディエンス個々のライフストーリーにおいて醸成された「記憶」が、マンガやアニメに立脚した実物大モニュメントに新たな「真正性」を注ぎ込む可能性を示唆する。松井氏が本稿で展開する議論は、その意味でまさに日々その対象を更新し続ける今日のメディア・文化研究を捉えるための新たな研究視角を提示するものである。

つづいて、山守伸也氏の論稿「ライフログに関する文化社会学的研究の可能性」では、ブログや Twitter といった現在ネット・メディアにおいて市民権を確立した SNS を事例に、そこで見られる「ライフログ」という利用者の営みにかんする文化社会学的考察が展開される。これまでの SNS を始めとしたネット・メディアをめぐる研究は、＜電子媒体—非電子媒体＞という技術的な二項対立図式に基づいたメディア論的枠組みに立脚するものが大半を占めてきた。加えて、そうした技術論に立脚したメディア論的アプローチは、SNS などの新たなネット・ツールを「何かを可能にするもの」として予言的に描き出すことを通例としている。一方、山守氏はこれら個々のメディアにおける技術的差異からではなく、利用者がネットという空間に個人的な記録を残す行為、すなわち、「ライフログ」という営みに焦点を当てることで、決定論的な分析枠組みが見落としてきた人々のメディアへの意味付けを明らかにしていく。メディア論という分析枠組みを用いることがある種自明視されているネット・メディア研究に対する山守氏の文化社会学からの応答は、今なおメディア・文化研究が多くの問題点を残していることを示していると言えるだろう。

最後の範梶煒氏による書評コラムは、日本のポピュラー文化の東アジアの国々における受容について書かれた最近の書籍を、中国からの留学生である彼女が、自身の経験と重ね合わせながら紹介してくれたものである。

〔参考文献〕

大野道邦、2011、『可能性としての文化社会学——カルチュラル・ターンとディシプリン』世界思想社。